

研究課題 (テーマ)	英語で行う講義 (院) を目指した英語学習プログラム		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	環境工学科・環境工学専攻	教授	楠井隆史
	環境工学科・環境工学専攻	教授	川上智規
	環境工学科・環境工学専攻	准教授	立田真文
	環境工学科・環境工学専攻	准教授	手計太一
研究結果の概要			
<p>以下の学習プログラムを試行した。</p> <p>1. 留学生、外国人研究者と本学学生の交流の場の提供 外国人向けの観光施設 (すしアカデミー) を利用した、留学生・外国人研究者と本学学生 (B2-M2) の交流を実施した。</p> <p>2. 英語で行うさまざまな課題へのチャレンジ 本学学生 (B4-M2) ならびに博士前期課程の学生が留学生を相手に富山の生活、観光などを発表する、「英語で語ろう、富山のいいところ！」を開催。TOEIC の受験。</p> <p>3. 英語教育研修会の受講 一般財団法人英語教育協議会において、研修会に参加し、学生の能動的な英語学習への導き方について講習を受けた。</p> <p>その結果、以下のような成果が得られた。 留学生・外国人研究者と本学学生との交流は英語の苦手意識の克服に効果的であるが、研究室が異なるとほとんど交流が無いのが実情である。従って初回の交流の機会を能動的に作る事が重要である。2回目以降は学生同士で誘いあって行動するため、英語を使う機会の提供という点で効果が大きい。初回が印象的であるほど次回につながると考え、外国人向けの観光施設を利用したが、ねらい通りであった。</p> <p>「英語で語ろう、富山のいいところ！」では留学生側からも母国の紹介があり相互理解を深めることに貢献できた。2名の学生が TOEIC735 点をマークしたことからも着実な成果が見られる。</p> <p>学生の能動的な英語学習への導き方についての講習は、共同学習 (学生同士の学び合い) に主眼がおかれたものであった。これを大学研究室に応用する場合には、日本人学生は研究の進め方等に質問がある場合は、教員ではなく、まず留学生と相談させ、結論を導き出してから教員と議論を行うという手法が考えられる。</p>			
今後の展開			
<p>学生等から強い要望のあった、英語カラオケなどを盛り込んで、英語と触れる機会を増やしていきたい。それにより、留学生と日本人学生の交流が増え、日本人学生の英語への苦手意識の克服につなげていきたい。一方、留学生側のホームシックの軽減や日本社会へ溶け込むことで、疎外感の払拭にも繋げたい。語学留学を経験してきた日本人学生に対しても、その後のアフターケアの機会を学科として積極的に提供することで、英語への意識の維持に繋げたい。</p>			